

書評

[評者]

横手幸太郎

千葉大学大学院教授



高齢者の生活機能の総合的評価

鳥羽研二 編著

B5判 頁184 2010年

定価 4,200 円(本体 4,000 円+税 5%)

[ISBN978-4-88002-710-4] 新興医学出版社刊

わが国の成人男女を対象としたある保険会社の調査によれば、“長生きすることに不安を感じる人”が全体の9割に上るそうである。ちなみに、不安を感じる理由のトップは「お金」と「病気・入院」、そして「介護」が続いたという。洋の東西を問わず、長生きはめでたく喜ばしいことであったはずなのに……。経済の先行きにも希望が見えてこない日本社会は、これまで世界中の誰も経験したことのない“超高齢社会”に今後どう対応していけばよいのか？

本書には、高齢者医療に対する考え方を根本から変え、介護予防の世界にパラダイムシフトをもたらすヒントがある。編著者の鳥羽研二氏は、そもそも高齢者は何らかの病気をもっているものだというスタンスで本書を書いている。そして、持病がありながらも生活上の不自由さを感じていないのが高齢者の特徴の一つであり、いったん入院を経験すると退院後も生活機能が低下したままになりやすいことが若者との違いである、と説く。核家族化の進行による独居老人や老老介護家庭の増加を考えると、生活機能の低下は生存に対する大きな脅威でもあるのだ。

高齢者の生活機能障害は、“加齢そのもの”と“完全には治癒しえない慢性疾患の積み重なり”によってもたらされる。これを心と身体の両面から定量的に評価するツールとして、総合機能評価(Comprehensive Geriatric Assessment: 以下, CGA)がある。すなわち、

ADL(日常生活活動度)、認知機能、気分や意欲、コミュニケーション能力、社会的なつながりや高齢者特有の身体症状などを客観的かつ包括的に評価する手法だが、本書では、その具体的方法と意義、エビデンスが、それぞれの専門家によって懇切丁寧に紹介されている。

明日からの診療に活かせる実用的な配慮に加え、CGAの活用により高齢者の生命予後や生活予後の改善、医療費削減を達成できること、薬物の有害作用を減少しうること、そして入院期間を短縮できること、などが説得力をもって語られる。本書でCGAを初めて知った人も、すでに診療に取り入れている人も、ページを繰るごとに、そのプラスアルファの効用を新たに認識するに違いない。

「体温や体重をはかるのと同じように」CGAが一般的検査として行われるようになれば、超高齢社会に、違う色合いの世界が開けるかも知れない。CGAのC、すなわちcomprehensiveを、編者は「懐に包み込むように/相手の立場に立って事柄が胸に落ちること」と訳し、CGAの精神が、医療に対する患者や家族の共感、そして感謝の文化をよみがえらせる可能性にも言及する。

“不安”を“希望”へと変換する手がかりの書として、ご一読をお勧めしたい。